



萎縮した
世界

川崎ゆきお

人は萎縮すると、小さな話になる。つまり個人的な。

別の言い方ではプライベートな、になるが、そんな大層なものではない。個人的な話とは、その個人だけにしか分からない、または関わらないようなローカルな話だが、それ以下のさらに小さな話もある。トイレトペーパーを一度にどの程度の長さで切るとか、耳の穴を拭くときは左側からで、穴の奥からとか。

ただ、小さな話は萎縮したときに、メインになったりする。萎縮とは、範囲が狭まることだ。この範囲は世の中との関わりとも絡んでいる。つまり仕事もなく、対人関係も少ないと、個人の天下になる。普通はその上位に、色々と面倒なものが繋がっており、そちらが実は個人よりも上位だったりする。その中では個人など小さな存在にすぎない。しかし萎縮すると、上の天井がなくなったり、左右の壁も消えたりする。自分が王座に座ったような気にはならないものの、小さな王国ができる。これは個人主義とはまた別で、主義とは言いがたい。萎縮した世界では快不快程度の原理ぐらいだろう。これは主義主張に変えてもいいのだが、実際には気持ちがいいか悪いか程度、気に入るか気に入らないか程度の、単純な感想でしかない。その感想以前の肌に合わないとか、好みではないとか、性に合わんとか、その程度のものだ。

ただ萎縮した世界では大きな望みは無理だ。何故なら一人ではできないからだ。

「ほほう、萎縮ねえ」

「悪いでしょ」

「悪いねえ。いい言葉じゃない」

「夏場はこれです」

「それで涼しくなるの？」

「なりませんが、動きがそれだけ小さくなります。これだけでも体力温存です」

「それで、何を萎縮するのかね」

「縮んでいるだけです」

「縮んで籠もるということかね」

「そうです」

「具体的には」

「極私的なことをします」

「既に君、やっているじゃないか」

「え」

「君は自分のことしか考えていない。だから、既にやっている」

「さらにです」

「ほう」

「だから、これはもう萎縮です」

「さらに自分のことで凝り固まるわけか」

「はい」

「まあ、いいけど、やらなければいけない仕事はやってもらうよ」

「ああ、はい」

「そんな個人の自由を盾にしても無駄だからね」

「あ、はい」

「自分さえよければいいというのは普通だ。面白くも何ともない。当たり前の話だ。だから、もっと気の利いた言い訳を作ることだね」

「これは自己主張でして」

「そんなもの聞き飽きた。要するに痛い目に合うのがいやなだけだろ」

「あ、はい」

「そんな自己防御じゃ、防御にならん」

「だめですか」

「だめだめ」

了